

【論文】

バウムガルテンの世界創造論

—近代ドイツ哲学における「流出（emanatio）」の一側面—

津田 乘里

序

私たち人間は自らの自由を問う際に、決定論と自由論という対立軸を古代哲学の時代から用いてきた。神の予見（providentia）に対して人間が自由であるかという主題を共有する論争は、自然科学的見地が導入・普及されつつあった18世紀にも確認することができる。近代では、ライプニッツ（Gottfried Wilhelm Leibniz, 1646–1716）に代表される予定調和説から、科学主義の立場である物理影響説へと、世界内部の構造を説明する理論はより自然科学的なものに移行していった。しかしながら、世界創造論については、「無からの創造（creatio ex nihilo）」というキリスト教の伝統的な世界創造論（以下「創造説」と呼ぶ）と、「流出による創造（creatio per emanationem）」という新プラトン主義的な世界創造論（以下「流出説」と呼ぶ）という二つの伝統的な理解が依然として共有されていたのである。これら世界創造論のゆえに、先の移行が決して容易に果たされなかつたことは想像に難くない。実際に、ヴォルフ（Christian Wolff, 1679–1754）のハレ追放という大事件（1723）はその困難さを象徴している¹。ヴォルフは、予定調和説をライプニッツから継承しながらもモナド論を廃棄し、その上でデカルト（René Descartes, 1596–1650）に端を発する心身二元論を採用することによって、世界を「メカニズム（mechanismus）」つまり「いったん神に創造されればその法則どおりに作動する自動機械」と捉えていた²。彼は少なくとも創造以後の世界について明確に自然科学的世界論に与したのであるが、世界を時計のような「自動機械（automaton）」と捉える彼の世界理解は決定論（「ストア派的運命（fatum Stoicum）」）と見做されてしまう³。そして、神のはたらきかけに対して人間の自由を前提する敬虔主義（Pietismus）から、とりわけ神学者ランゲ（Joachim Lange, 1670–1744）によって、スピノザ主義というレッテルの下で鋭く批判されることになる⁴。

このような思想状況の下でライプニッツの思想を体系付けたヴォルフの後継者として知られるバウムガルテン（Alexander Gottlieb Baumgarten, 1714–1762）は、哲学及び神学に関する体系的著作を残している。従来の評価とは異なり、今日ではカント（Immanuel Kant, 1724–1804）に与えた直接的な影響が見直されることで新たに価値づけられるとともに、バウムガルテン自身の思想もその独創性が評価されつつある⁵。さらに、彼の兄ジークムント・ヤーコブ・バウムガルテン（Siegmund Jakob Baumgarten, 1706–1757）は、ランゲと同様に敬虔主義を代表する神学者の一人であり、彼もまたその影響を兄から受けていた。したがって、バウムガルテンは複雑に絡まる当

時の思想から直接に影響を受けながら、自らの思想を形成していったといえる。彼は、いかなる世界創造論を近代的世界観と伝統的な神学的世界観の緊張関係のうちに唱えたのか。本稿は、彼の主著『形而上学 (Metaphysica)』に考察対象を絞り⁶、彼の世界創造論の一端を明らかにするものである。具体的には、同著作において流出説批判が行われている点に着目することで、創造説と流出説という二つの世界創造論の比較から彼の世界創造論を検討する。

本稿の構成は次のとおりである。第一章では世界がいかにして創造されたのか、まさに世界創造論の中心的議論を扱う。まず、第一節において「世界の創造 (creatio mundi)」に関する記述 (MT §. 926) の検討から、バウムガルテンの世界創造論を詳解する。次いで第二節では、彼の流出説批判 (MT §. 927) の論点を整理し、その内容を明らかにする。以上の議論を基礎として、第三節では創造説と流出説の比較を通じて、バウムガルテンが想定していた流出説の定式化を試みる。そこから、創造説の特徴が世界の創始における神と世界の非連続的関係であるという解釈を私たちに獲得するであろう。続く第二章では、創造以後の世界及び被造物と神の関係へと議論を広げ、「維持 (conservatio)」という神の別のはたらきにも目を向けよう。まず、第一節では維持に関する記述 (MT §. 953) から創造と維持という二つの神のはたらきの共通点を、さらに後続の記述 (MT §. 954) からそれらの相違点を検討する。本稿で私たちが問題とするのは創造と維持の相違点であり、すなわち維持の場面における被造物の性格である。その点について、第二節では同著作の第二版序文へと射程を伸ばし、以上の議論が実体論と密接に連関している点を指摘する。

第一章 バウムガルテンの世界創造論

第一節 創造説：無からの創造 (creatio ex nihilo)

まず、バウムガルテンによる世界の創始についての記述から確認しよう。

§. 926⁷

作用因は作用を現実化する (§. 319, 210)。神はこの宇宙の作用因である (§. 854)。したがって、神はこの宇宙を永遠からすなわちこの世界が始まりをもたないように現実化したか、あるいは時間のうちでつまり永遠からではなくこの世界を現実化したかのいずれかであるが (§. 10)、いずれの場合も世界の部分は世界に先立って現存しない (§. 371, 394)。したがって、いずれの場合も世界は無から現実化されたのである (§. 228)、神こそが無から世界を現実化したのである (§. 854)。無から何かを現実化することは《創造する》ことである。したがって、神はこの宇宙の創造者である。

上記の引用は彼が創造説の立場に与していることを端的に示しているが、彼の創造説をより厳密に理解するためには、ここで前提とされる世界及び神の定義を確認する必要がある。まず、世界とは「他の系列の部分ではない現実的で有限なものどもの系列」(MT §. 354) であり、「非必然的に存在しているものども (entia contingentia)」から成立している (MT §. 365)。ゆえに、世界は「絶

対的に内的に可変的である」(MT §. 365)。このとき、作用によって何かを現実化する(*actuare*)際の原因つまり作用因を世界の内部に認めるとは、世界のあらゆる部分が非必然的である以上困難である⁸。ゆえに、世界は「外世界的な存在」として(MT §. 388)、「必然的な实体(*substantia necessaria*)」である神を、この世界の作用因として要請する(MT §. 854)。換言すれば、神は世界の現実存在(*existentia*)に対する作用因として、さらに世界という可変的で非必然的であるような有限な实体を成立させるための外世界的で必然的な存在として定義されるのである。したがって、神による世界創造が永遠においてなされたとしても、あるいは時間のうちでなされたとしても、世界は無から現実化したと結論される。

無からの創造に与するバウムガルテンの立場、つまり世界の部分が世界に先立って現存しないという彼の主張は、「無からの発生(*ortus ex nihilo*)」(MT §. 228)という発想に基づきをもつ。「無からの発生」とは「非-現実存在から現実存在への変化」(MT §. 227)であって、いかなる部分も発生に先立って現存することはない(MT §. 228)。この場合に「変化(*mutatio*)」とは「存在における諸規定の継起そのもの」(MT §. 125)であるから、「可変的なもの(*mutable*)」とはそのものの諸規定のなかで或る規定が他の諸規定の後に現存するというような(MT §. 124)、時間的変化が可能なものにかぎられる。ゆえに、「無からの発生」が可能であるのは非必然的なものに限られ、翻って必然的な存在が無から発生することは不可能である(MT §. 228)。したがって、非必然的なものの系列である世界の部分が創造以前にあらかじめあるなどということは決してありえない⁹。もし世界に先立って世界の部分が現存していたならば、そのとき世界は真に現存していないかったとはいはず、世界が生じるという事態そのものが不可能になってしまうのである(MT §. 371)。

バウムガルテンの世界創造論、とりわけ世界の創始に関する議論とは、非必然的なものの系列からなるものとして世界を捉えることで、世界の現実存在に対する作用因を外世界的で必然的な存在である神に認め、世界が無から創造されたことを導出するものである。私たちは次節の流出説批判に先立ち、彼の世界創造論ないし彼の与する創造説の特徴として次の点を確認しておきたい。すなわち、創造という一種の発生はあくまでも「非-現実存在から現実存在への変化」を基礎としており、それは非-存在から存在への変化ではないという点である。だからこそ、彼の創造説では世界の現実化あるいは世界の現実存在が問題とされ、可変性を一つの特徴としてもつ非必然的なものの系列としての世界という観点から議論が展開されているのである。ここから、必然的で無限な存在である神は、ただ世界の現実化の作用因として要請されるばかりでなく、世界の可変性のために、その存在が外世界的なものとして要請されたのである。

第二節 流出説：流出による創造(*creatio per emanationem*)への批判

本節では、バウムガルテンによる流出説批判に着目し、彼の区分に即して三つの論点を順に整理する。

§. 927¹⁰

《流出による創造》は、次の仕方で神の本質からの宇宙の現実化であったはずである〔が、

実際にはそうではない]。1) 世界は無から現実化されなかった (§. 926)。というのも、神の本質は必然的な存在だからである (§. 109, 816)。これは§. 926に反する。2) 神の本質の全体あるいはその部分がこの宇宙へと変化しうるはずであった [が、実際にはそうではない] (§. 370) が、これは§. 839に反する。3) 神の部分が神の外に置かれ (§. 388)、さらに神は複合されたものであろうが (§. 225)、これは§. 838に反する。流出による創造が不可能であろうことは、さらに多くの仕方で明白である (§. 7)。

第一に、もし神の世界創造が流出によるならば、1) 世界は無から現実化されなかった。これは、端的に流出説が創造説と対立することを意味している。上記の引用から明らかのように、流出説の特徴は、「神の本質からの宇宙の現実化」という点に見出される。というのも、創造説は世界の部分ないし全体がその現実化に先立って現存することを容認しない一方で、流出説は神が自身の本質から世界を創造すると主張するからである。つまり、流出説は世界の部分が世界の現実化に先立って現存することを認めている。ここで留意すべきは、バウムガルテンがあくまでも神の本質定義に即してこの第一の批判を行っている点である。「というのも、神の本質は必然的な存在だからである」という言説から明らかのように、神が必然的かつ不可変的なものであること、さらに神の本質も不可変的で必然的であって (MT §. 816) 「生成消滅 (ortus et interitus)」することなく永遠にあることは (MT §§. 227, 228)、§. 927においても前提とされている。したがって、流出説は、神の本質という生成消滅することのないものを少なくとも世界の部分とする以上、世界を無から現実化することはない。

第二に、もし神の世界創造が流出によるならば、2) 神の本質の全体あるいはその部分がこの宇宙へと変化しうる。世界の現実化が「非-現実存在から現実存在への変化」であることは前節で指摘したとおりであるが、これはすなわちあらゆる世界の現実存在とは「様態 (modus)」であることを意味している (MT §. 370)。このようなバウムガルテンの世界理解に与する場合、神の本質から世界が現実化されることは、神の本質の全体ないし部分が世界へと変化することとして説明できねばならない。このことは同時に、神の本質の全体ないし部分が可変的であるという帰結をもたらしかねないだろう。しかしながら、神が必然的な存在であり、その本質もまた絶対的に内的に不可変的である以上 (MT §. 839)、そのような帰結は成立しえない。したがって、神の本質が世界へと変化したとする流出説に与しながらも世界の可変性を尊重しようと試みる場合、少なくとも神の本質が可変的なものであらねばならない。

第三に、もし神の世界創造が流出によるならば、3) 神の部分が神の外に置かれ、さらに神は複合されたものであろう。この批判でも、バウムガルテンは世界の現実化の作用因である神が外世界的な存在であるという自身の理解に与している (MT §. 388)。すなわち、世界が無限な実体つまり神そのものでも無限な実体の内的規定つまり神の本質でもないとき、世界は無限な実体の外に現存する。他方で、世界の内部から排除された無限な存在は外世界的な存在として定義される。ゆえに、世界を非必然的なものの系列として理解するかぎり、神の本質から世界が創造されたならば、世界へと変化した神の本質は神の部分でありながらも神の外に置かれねばならない。このとき神は部分をもつような複合されたものであると結論される。しかしながら、神が複合されたものであることは、「単純な存在 (ens simplex)」である「神の最高の単純性 (summa dei

simplicitas)」(MT §. 838) と衝突してしまう。したがって、流出説を採用しながら世界の可変性を尊重しようとするならば、神に対して全体と部分という発想を用いることになるのである。

私たちはバウムガルテンによる流出説批判を順に検討してきたが、彼の想定する流出説の特徴とはどのような点にあるのか¹¹。それは「神の本質からの宇宙の現実化である」という、§. 927冒頭の記述に集約されると私たちは解釈する。すなわち、流出説とは、神の本質からの世界の現実化と定義できる。このとき神と世界が神の本質を共有するから、そのために第二と第三の批判は生じた。したがって、第二と第三の批判は二次的なものであると理解することが可能であり、彼の中心的批判とは神の本質という必然的な存在から世界が現実化されるという第一の批判に他ならない。必然的な存在から世界が現実化されることは、バウムガルテンが与する創造説の特徴、すなわち必然的な存在を外世界的な存在とすることで世界が無から現実化されることを可能にするという点と正面から衝突するからである。

第三節 創造説と流出説の特徴

第一節及び第二節から、次の世界の定義が§. 926 及び§. 927 に共通の前提として据えられていると理解することは十分に可能である。繰り返しになるが、世界は非必然的なものの系列であって、絶対的に内的に可変的である。したがって、創造説と流出説の比較において問題となるのは、先のように定義された世界の現実化がいかになされたかであり、そのときに次の神の定義と衝突するか否かという点に他ならない。すなわち、神が必然的で外世界的な存在であり、さらに神及び神の本質が絶対的に内的に不可変的である場合に、矛盾なく成立する世界の現実化の方法はどのようなものかである。バウムガルテンはそれを創造説であると主張した。その根拠は第一節に示したとおりであるが、ここで改めて彼の創造説の特徴を指摘するとしたら、それは世界がそのもののうちに究極的な作用因をもたないという世界の在り方であろう。というのも、必然的な実体が世界に対して外世界的な存在であるからこそ、先の世界の定義が創造説において成立するからである。この特徴は、世界の創始における神と世界の非連続的関係と表現できる。

上記の解釈を踏まえるならば、流出説の特徴はどのように表現可能であろうか。流出説の場合に、世界は神の本質から現実化されることとなる。流出説は無からの創造ではない点で批判されるが、その批判のなかでも看過してはならないのは、神の本質を神と世界が共有するという思想をもつ点である。ゆえに、神と世界の関係という観点から流出説の特徴をまとめるならば、それは世界の創始における神と世界の連続的関係と解釈できよう。

私たちは二つの世界創造論の特徴を、創造説については世界の創始における神と世界の非連続的関係を示すものとして、流出説については神と世界の連続的関係を支持するものとして整理した。この理解に加えて、バウムガルテンの世界及び神の定義に改めて注目するならば、不可変的である神と可変的である世界がそれぞれの性質を侵犯することなく共に成立するための世界創造論として、彼の創造説を解釈することも可能であろう。

第二章 神と被造物—神のはたらきをめぐって—

第一節 創造者 (creator) 及び維持者 (conservator) としての神

創造という神のはたらきについて第一章では流出説批判を手掛かりに考察してきた。ところで、一般に世界創造論とは世界の創始に限定されず、創造以後の世界に対する神のはたらきをも問題とする。バウムガルテンは、創造以後の世界への神のはたらきを「維持」と呼び、次のように説明した。

§. 953¹²

創造を通じてのみ現存しうるものは何であれ、維持によってのみ持続することができる (§. 950, 926)。さて、この世界のあらゆるモナドと、この世界のうちで実体的なものであるならば何であれ、神の創造物である。したがって、世界のあらゆるモナドと、この世界のうちで実体的なものであるならば何であれ、それらの持続のいかなる瞬間も、神によつて維持されている (§. 928)。

「創造を通じてのみ現存しうるもの」とは、「創造物 (creatura)」つまり被造物であり (MT §. 928)、その語は「この宇宙のあらゆるモナド」「有限な存在」「実体的なもの (substantiale)」等と説明される。「他のものによって引き起こされることでのみ現存するものは、他のものによって引き起こされることでのみ持続する」 (MT §. 950) のであるから、これらの被造物は自らの創造者である神によって常に維持されることでのみ持続することができる。ゆえに、神は世界の「維持者」として (MT §. 950)、創造以後の世界につながりをもつてゐる。したがって、維持とは創造者がその創造物に対してそれらが持続するいかなる瞬間にもはたらき続けるという一種の作用であるといえよう。実際に、維持を定義した直後の§. 951において、維持は「神の連続的な影響 (influxus dei continuus)」と言い換えられている。「影響 (influxus)」とは「自身の外の実体への実体のもつ作用」のことであり (MT §. 211)、維持という連続的な影響は実在的なものである。「実在的な影響 (influxus realis)」とは、「実在的な受動作用 (passio realis)」との組み合わせで、或る作用について作用者と受動者の間の能動と受動の関係が反転しないことを意味する (MT §. 212)¹³。ゆえに、維持という連続的な影響が実在的であるかぎり、神の影響は被造物にとって「実在的な受動作用」なのであり、両者の能動-受動関係は決して反転しない。その関係については創造も同じであるといふ (MT §. 951)¹⁴。ここに、創造と維持という二つの神のはたらきの共通性が見出される。すなわち、両者はともに世界及び被造物に対する実在的な影響であり、能動者である神と受動者である世界及び被造物という関係は決して反転しない。この共通性がありながらも、彼は維持を「連続的創造」と呼ぶことを積極的にはなさなかった¹⁵。以降では、創造と維持という二つのはたらきの相違点を検討しよう。

後続の記述 (MT §. 954) に目を配ると、神による世界の維持について、神と被造物は「第一作用因 (causa efficiens prima)」と「第二作用因 (causa efficiens secunda)」という語で説明されている。第一章で確認したように、神は世界にとっての作用因として定立されながらも外世界的な

存在であるから、「神を除く作用因は、[つまり] この世界のあらゆる実体は神に従属する」(MT §. 954)。つまり、「神は単純な第一作用因であり、残りの一切は第二作用因である」(MT §. 954)¹⁶。「第一」と「第二」という区別はあるものの、神だけでなく被造物もまた「作用因」と呼ばれていることに私たちは注目しなければならない。さらに、バウムガルテンが「実体的なもの」という聞き慣れない名称を被造物に与えている点にも着目する必要があろう。『形而上学』の「存在論」において「実体的なもの」とは、「偶有性が内属することができるところの実体のうちにあるもの」であり、「偶有性が内属することができるところのそのものが主語である」場合に偶有性が内属することを可能にしているところのもの、つまり「力(vis)」という根拠を意味していた(MT §§. 196-197)。そこでは、「他のものの(他のもののうちで)規定としてではなくとも存在できる」とのと定義された「実体」について、実体のもつ内属可能性が着目され、その機能が「実体的なもの」という概念によって新たに定義されていたのである。以上の「存在論」での議論を踏まえるならば、維持の場面における「実体的なもの」という名称の使用は、被造物が創造以後の世界において「力」という根拠をもつことを示す。まさにこの点にこそ、創造と維持という神の二つのたらきの相違があらわれていると私たちは考える。つまり、創造においてはあくまでも神からのはたらきのみが問題とされ、創造物はただ「世界」と呼ばれるのみであった。しかしながら、維持の場面では、被造物は「第二作用因」や「実体的なもの」といった、他のものの原因や根拠であることを示唆する名称で換言されている。創造における神と世界の関係を非連続的であると表現できるならば、維持における神と世界の関係は、第一に神の維持というはたらきが連続する瞬間に絶えず作用している点で、第二に神と世界のうちの被造物が「力」という類似の性質をもつ点で、連続的であると表現することができよう。

以上から、創造と維持という神の二つのたらきをめぐって、神と世界及び被造物の関係が世界の創始と創造以後とで異なっていると明らかにされた。厳密には、世界及び被造物の性格が変容していると説明すべきであろう。あるいは、バウムガルテンの記述に即して換言するならば、次のようなことを意味する。創造以後の世界において「無限な実体は唯一の実体ではない」(MT §. 389) し、「無限な力は唯一の力ではない」(MT §. 391)。すなわち、「あらゆる世界には有限な力があり、それゆえこの世界にも有限な力はある」(MT §. 391)。

第二節 第二版序文における実体論へのつながり

以上の解釈は、初版から一貫していたバウムガルテンの実体論に符合するものであるから、以下でその根拠となる彼の記述をとりあげよう。彼は『形而上学』第二版序文において、「無限な実体は唯一の実体ではない」ことを次の二つの例で説明している。「『無限な実体は唯一の実体ではない』、すなわち一つの実体である、それは私たちの惑星体系における太陽は唯一ではなく、すなわち一つの太陽であるということに慣れ親しんでいるのとまさに同じように、あるいは、フランスの王は唯一の王ではなく、すなわち一人の王であるように」(MT[2011]S. 18)。これらの例が意味しているのは、第一作用因として無限な力をもつ神を外世界的な存在として認めるとしても、この世界はやはり一つの系列としてその内に第二作用因を、つまり実体的なものを有しているということである。

さらに注目すべきは、神のみを唯一の実体と見做し (MT[2011]S. 18)、外世界的な存在として

の神を認めないこと（MT §. 855）をスピノザ主義であると、バウムガルテンが考えていた可能性である。ここで実体について付言しておこう。彼はアリストテレス、デカルト、スピノザ、そしてヴォルフの実体定義を批判している。具体的には、デカルト及びスピノザに対しては実体が神のみに相応しい定義である点を、他方でヴォルフの実体定義では被造物にのみ妥当するものである点を論点にしていた（MT[2011]S. 10–14）。つまり、バウムガルテンにとって、実体とは神にも被造物にも相応しい定義をもつものでなければならなかつたのである。

世界の創造と維持を明確に区別するバウムガルテンの世界創造論は、創造における神と被造物の非連続性と、維持における両者の連続性とを両立させるものである。この両立によって、創造以後の世界では、神と被造物の類似性を強調するような名称（「第一作用因」と「第二作用因」、「実体」と「実体的なもの」）の使用が可能になった。これらの名称の区別が、世界及び被造物の規定の区別に伴うものであることから、世界創造論が実体論と密接な連関をもつことは明白である。

結

バウムガルテンの世界創造論の特徴は、創造と維持という神の二つのたらきを明確に区別することで、伝統的な創造説を踏襲しつつ、創造以後の世界に一定の自律性を認めようとしていた点にあると、私たちは結論付ける。この区別には創造以後の世界のうちで「第二作用因」つまり「実体的なもの」という「力」をもった有限な実体が作用していることを、肯定的に評価する姿勢が見受けられよう¹⁷。創造以後の世界に一定の自律性を与える彼の思想は、もちろん当時の潮流のなかでいわば必然的に生じたものに思われるかもしれない。しかしながら、私たちはその世界の自律性が神と世界の非連続性のみによって基礎付けられているわけではないことに注意したい。というのも、世界が自律的でありうるのは、神に類似的な性質が被造物に認められているかぎりにおいてであるからである。彼は神と被造物を作用因という同じ名称で捉えていたし、「実体」（*substantia*; 名詞）と「実体的なもの」（*substantiale*; 形容詞の名詞化）という表現からも両者の類縁性（いわば連続性）は明白である。さらに、神と被造物の連続性を指摘することは、世界の創始において流出説を批判したはずのバウムガルテンが、世界の維持における、いわば流出説的な関係を神と被造物のうちに認めていたことをも意味する。例えば、このような神と被造物との関係性には、最高に一なるものであるという源泉と、その多なるものとしての派生物という関係を読み込むことが可能であろう¹⁸。さらに、思想的影響関係にあったライプニッツが創造に対して流出という語を用いる点も興味深い¹⁹。

本稿は、バウムガルテンの世界創造論を、第一に流出説批判に着目をして、そして第二に創造と維持という神の二つのたらきに注目して検討してきた。彼が創造説と流出説を対立させたことの思想史的根拠については序で示唆したとおりであるが、彼のテクスト内部においてもその根拠を見出すことが可能であろう。具体的には、「神の最高の自発的な行為は内在的（*immanens*）であるか、超越的（*transiens*）であるかのいずれかである」（MT §. 895）という記述である。内在的行為と超越的行為という観点から、創造説と流出説、さらに創造と維持という神の二つのたらき

らきを再解釈することは、次の二つの発展的課題を提示する。第一に、流出説批判においてバウムガルテンが想定していた思想ないし思想家の特定である。当時流布していたスピノザ理解に目を配ると、その理解は批判を一つの目的とした定型的なものにすぎなかつたことがわかる。例えば、ペールをはじめとする当時の思想家は、東洋の教説の二つの中心的特徴として「流出と魂の輪廻転生」を取り上げ、それらの特徴をプラトニスムと汎神論、そしてスピノザ主義とに結びつけている²⁰。本稿ではこれらの思想の区別に立ち入ることができず、彼の流出説批判の仮想敵を十分に明らかにすることことができなかつた。この点を明らかにするためにも、内在的行為と超越的行為という観点の導入は有効であろう。第二に、自由論と決定論の対立という当時の論争、さらにはスピノザ及びスピノザ主義批判との関係をも視野に入れた思想史研究である。例えばカントは、バウムガルテン『形而上学』のまさに流出説批判に対して、神の自由という観点から流出説を批判すべきであると考えていた²¹。思想史的アプローチは、バウムガルテンが創造以後の世界の自律性を見出したとする本稿の主張により一層の説得性を与えるであろう。

凡例

バウムガルテンのテクストについては、次のとおりである。

- * 原文には著者バウムガルテンによる参照指示がある。訳文では原文にない丸括弧に入れて、例えば(§.1)のように表記した。
- * 原文では強調部分はスマート・キャピタルで綴られている。これは《》にいれて表示した。
- * 翻訳上、補足や説明のために補訳する箇所は〔〕で表記した。
- * 『形而上学』からの引用については2011年に刊行された羅独対訳版に依拠する。第二版序文については羅独対訳版での頁数を指示し(例: MT[2011] S. 1)、各項(§)については例えばMT §. 1のように表記した。

一次文献

Baumgarten, Alexander Gottlieb, 1757(1739). [MT] *Metaphysica*, editio IV, Halle:Hemmerde. Reprint. Hildesheim: Olms, 1982. (Übers.: *Metaphysik: Historisch-kritische Ausgabe*. Günter Gawlick and Lothar Kreimendahl (übers. & hrsg.). Stuttgart-Bad: Frommann-Holzboog, 2011. Transl.: *Metaphysics: A Critical Translation with Kant's Elucidations, Selected Notes, and Related Materials*. Courtney D. Fugate and John Hymers (tr. & ed.). London, New Delhi, New York, Sydney: Bloomsbury, 2013.)

Eberhard, Johann August, 2015. *Preparation for Natural Theology: With Kant's Reflections, Natural Theology Lectures and Related Materials*. Courtney D. Fugate and John Hymers (tr., ed. & intro.). Bloomsbury.

- ピエール・ベール『歴史批評事典III』（『ピエール・ベール著作集』第5巻所収。）野沢協訳、法政大学出版局、1987年。
- ライプニッツ『弁神論』（『ライプニッツ著作集』第7巻「宗教哲学」所収。佐々木能章訳、工作舎、1991年）
- 『神の大義』（『ライプニッツ著作集』第7巻「宗教哲学」所収。佐々木能章訳、工作舎、1991年）
- 『形而上学叙説』（『ライプニッツ著作集』第8巻「前期哲学」所収。西谷裕作訳、工作舎、1990年）
- 『モナドロジー〈哲学の原理〉』（『ライプニッツ著作集』第9巻「後期哲学」所収。西谷裕作訳、工作舎、1989年）

二次文献

- App, Urs, 2010. *The Birth of Orientalism*, Philadelphia, Pennsylvania: University of Pennsylvania Press.
- Kremer, Klaus, 1972. ‘Emanation’, *HWPB*, Bd. 2: S. 445–448.
- Mercer, Christia, 2001. *Leibniz's Metaphysics: Its Origins and Development*, Cambridge: Cambridge University Press.
- McDonough, Jeffrey K., 2007. ‘Leibniz: Creation and Conservation and Concurrence,’ *The Leibniz Review*, 17: pp. 31–60.
- Niggli, Ursula, 1999. *Die Vorreden zur Metaphysik*, Zürich: Klostermann.
- 増山浩人『カントの世界論 バウムガルテンとヒュームに対する応答』北海道大学出版会、2015年。
- 山下和也「ドイツ啓蒙と敬虔主義—自由論を巡って—」、『近代からの問いかけ—啓蒙と理性批判—』（カント研究会編集『現代カント研究9』）晃洋書房、2008年, pp. 105–129.
- 『カントと敬虔主義—カント哲学とシュペーナー神学の比較—』晃洋書房、2016年。
- 山本道雄『カントとその時代—ドイツ啓蒙思想の一潮流—』晃洋書房、2008年。
- 『クリスティアン・ヴォルフのハレ追放顛末期—ドイツ啓蒙思想の一潮流2—』晃洋書房、2016年。

¹ ヴォルフのハレ追放の経緯については、山本[2016]を参照。

² Cf. 山下[2008]p. 116.

³ Cf. 山本[2016]p. 66.

⁴ Cf. 山下[2008]pp. 114–118.

⁵ Cf. MT[2013]p. 14.

⁶ バウムガルテンの『形而上学』は、諸学の基礎学である「存在論(ontologia)」、世界そのものについて語る「宇宙論(cosmologia)」、経験的心理学と合理的心理学からなる「心理学(psychologia)」、そして世界の創造を主題の一つとして有する「自然神学(theologia naturalis)」という四つの部門(pars)から構成されており、著作全体を通じて、先立つ記述が後続の記述の基礎付けを担っている。

⁷ „Causa efficiens actuat effectum (§. 319, 210). Deus est causa efficiens huius universi (§. 854). Ergo deus actuavit hoc universum, aut ab aeterno, i.e. ita, ut mundus hic non haberit initium, aut in tempore s. non ab aeterno (§. 10), in neutra casu pars mundi mundo praeexistit (§. 371, 394). Ergo in utroque casu mundus est actuatus ex nihilo (§. 228), et deus est, qui eum actuavit ex nihilo (§. 854). Actuare quid ex nihilo est CREARE. Ergo deus est creator huius universi.“

⁸ 世界を系列として考える場合、その究極原因を求めて「無限への進行 (progressus in infinitum)」に陥る可能性が生じる。スピノザの汎神論的な（決定論的な）世界観に陥ることなしに、無限遍歴という先の可能性を退けたバウムガルテンの議論については増山[2015]pp. 64–66 を参照のこと。

⁹ 世界の部分が先立って現存していることを認めるることは、そのような部分がすでに (iam) 現実存在という点で規定されたものであると認めることであり、そのとき「有限な現実的なものどもの系列」である世界は (MT §. 354) 、もはやほとんど可能的ではなくくなってしまう (MT §. 371)。つまり、世界の可変性が脅かされるのである。この点については、世界の普遍的連関と普遍的調和との帰結として説明することができる（増山[2015]pp. 27–33）。

¹⁰ „CREATIO PER EMANATIONEM esset actuatio universi ex dei essentia, eiusmodi creatione 1) mundus non actuaretur ex nihilo (§. 926). Essentia enim dei est ens necessarium (§. 109, 816). Quod contra §. 926. 2) aut tota dei essentia, aut pars eius mutari posset in universum (§. 370), quod contra §. 839. 3) pars dei esset extra deum posita (§. 388), deusque compositus (§. 225), quod contra §. 838. Pluribus adhuc modis patet, creationem per emanationem esse impossibilem (§. 7).“

¹¹ この批判の問題点として、バウムガルテンが流出説に特有な神の定義を十分に考慮していない点を指摘しておきたい。創造説で前提とされる神と、伝統的な新プラトン主義思想における一者とは、決して同一視できるものではない。さらに当時の思想状況を踏まえるならば、所謂一者と、スピノザ主義における神の相違にまで配慮することが求められよう。

¹² „Quicquid existere non potest, nisi per creationem, non potest durare, nisi per conservationem (§. 950, 926). Iam omnes huius mundi monades, et quicquid est in eodem substantiale, dei creatura est. Ergo omnes mundi monades, et quicquid est in mundo hoc substantiale, conservatur a deo quovis momento durationis sua (§. 928).“

¹³ 「いわれる (dicitur)」という表現からも示唆されるが、師であるヴォルフは次のような記述を残している。「実在的な作用関係に見える事態も形而上学的レベルから照射すれば実は観念的な作用でしかない」のである（ヴォルフ『世界論』第四一、四二節）（山本[2008]p. 234）。したがって、「実在的」と「観念的」という発想は彼に由来するものである。

¹⁴ 創造も維持もともに実在的な影響であるという点では区別されない。ゆえに、「維持は連続的創造といわれても不適切ではない (conservatio non male dicitur continuata creatio.)」と補足している (MT §. 951)。ここでは第一節及び第二節で確認した「創造」という術語を非常に限定的に用いている点には注意が必要であろう。

¹⁵ 「連続的創造」については、当時の主要な論題の一つであったといって差し支えない (cf. ライプニツィ『弁神論』第382節～第395節)。

¹⁶ 「第一のもの (prima)」と「第二のものども (secundae)」について、バウムガルテンは次のように説明する。すなわち、或る一つの原因付けられたもの (causatum) がいくつかの原因 (causae) をもつとき、そのような原因是「共原因 (concausae)」である (MT §. 314)。この場合、その一つの原因付けられたものは、複数の共原因をもつが、それらのうちには相互に他のものの原因であるか否かという区別が可能である。もしそれらの内の一つが他の共原因の原因である場合、その一つに原因付けられた共原因是 (その一つの共原因に) 「従属した共原因 (concausa subordinata)」であり、さらにその一つの共原因が他の一切の共原因を従属させるならば、前者は「第一原因 (causa prima)」、後者は「第二原因 (causa secunda)」である (MT §. 315)。したがって、第一作用因と第二作用因という表記では、原因と原因付けられたものという関係の、とりわけ第一作用因が他の一切の作用因であるという点に力点があるといえよう。また本文では単複の区別を明示しなかったが、バウムガルテンは共原因の定義項 (MT §. 314) や第一原因と第二原因の定義項 (MT §. 315) はもちろん、世界の維持を語る §. 954においても、第一のものを单数、第二のものを複数として、一貫した記述をおこなっている。

¹⁷ 世界の維持における神と被造物の作用の内実については、「創造の目的 (finis creationis)」 (MT §. 942–949) を今後検討する。

¹⁸ 流出説批判の際に論点となった神の単純性について、「単純性 (simplex)」とは「存在論」において一貫して唯一であることと結びついた概念であり (e.g. MT §§. 88, 96)、それは「多なるものではないかぎり」という仕方で定義されていた (MT §. 77)。ゆえに、「神の最高の単純性」を指摘することは (MT §. 838)、神と被造物の間に「一と多」の関係を前提とすることを私たちに示唆させる。さらに、バウムガルテンにおいて部分において全体を知るという発想を見出し得る点もここに注記する (cf. MT §. 155, e.g. MT §. 516)。

¹⁹ 『モナドロジー』第47節における「神性の絶え間ない閃光放射によって刻々に産みだされてくる」という表現に流出的な創造觀を読み込むことは可能であるし、『形而上学叙説』第14節及び第32節にも「流出」という表現を確認することができる。ライプニツィの「流出」について網羅的な研究としては Mercer[2001]を、本発表と同様にライプニツィの世界創造論を創造と維持さらに協働という観点から整理した研究として McDonough[2007]を参照。

²⁰ Cf. App[2010]p. 5.

²¹ Cf. Eberhard[2015]pp. 197–198.